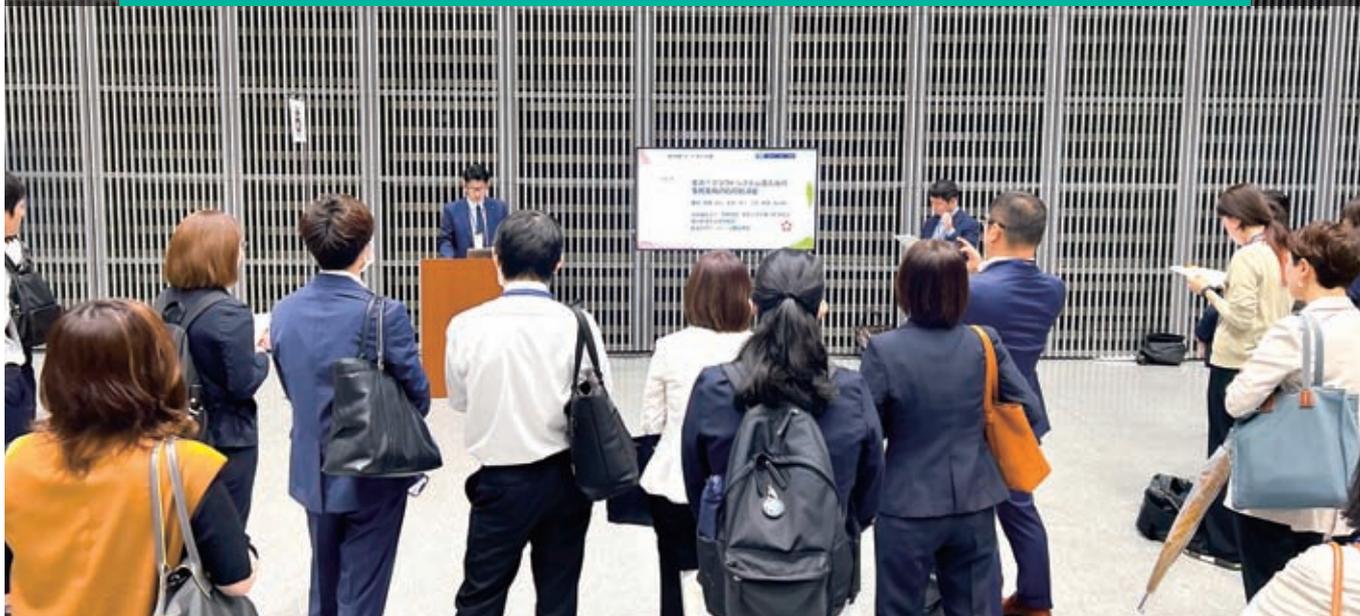


報告 第24回CRCと臨床試験のあり方を考える会議2024

済生会共同治験ネットワークを発信



日本の創薬力の向上には 国際標準化と効率化の促進が鍵

治験に関わる国内最大の学会「第24回CRCと臨床試験のあり方を考える会議2024」が9月15・16日に、〈北海道〉札幌コンベンションセンターで開かれ、1500人以上が来場。web参加をあわせると3000人以上が参加し、治験について議論しました。本学会には済生会から本部と病院の職員が参加しました。

本部共同治験推進室室長 大山彰裕

済生会共同治験 ブースを初出展

病院や製薬会社などを支援する企業や臨床試験の中核を担う病院群、臨床試験を支えるシステム会社等がブースを構える中、済生会も共同治験ネットワークのブースを初出展。本部共同治験推進室から筆者を含め3人が参加し、本会の共同治験事業について、済生会のセントラル機能やDXの取り組みを紹介しました。

済生会病院の治験担当者 それぞれの取り組みを発表

会議には〈東京〉中央病院、〈神奈川〉横浜市南部病院、〈三重〉松阪総合病院、岡山済生会総合病院も参加しました。

15日は中央病院臨床研究センター治験管理室の亀田高寛さんが「実測！クラウドシステム導入後の事務業務の負荷軽減量」と題して、治験手続き文書をクラウド上で保存・管理する「Agatha」を用いた業務効率化を発表しました。

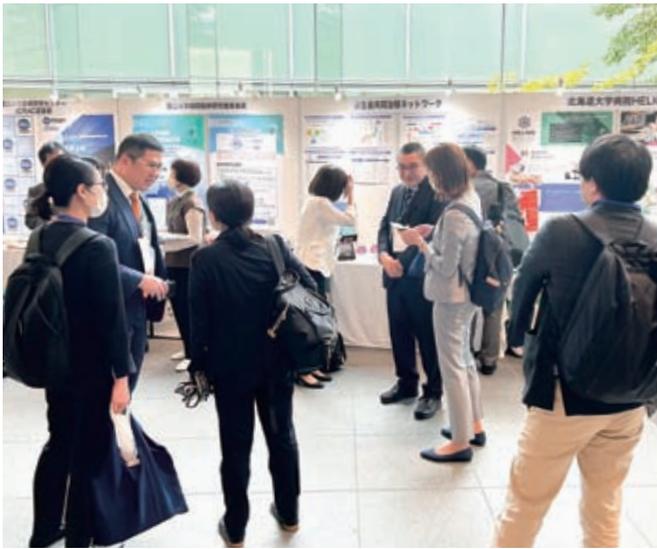
横浜市南部病院臨床研究支援センター治験管理部の安岡晋吾さんは「済生会セントラル



第24回をむかえて、初の北海道開催。国際都市札幌の象徴「札幌コンベンションセンター」で行なった

IRBの活用とその有用性について」と題し、被験者の人権や安全性について審査する治験審査委員会（IRB）を自院から済生会本部のセントラルIRB（済生会中央IRB）に移行したことで、業務負担が軽減されたことを報告。移行により治験依頼者から「済生会の病院が一括で審議可能となり、費用の削減や効率化につながった」と評価された、と話しました。

16日は中央病院の亀田さんが再び登壇、15病院24人が属する



製薬会社、医師をはじめ50人以上の治験関係者が済生会の取り組みに興味を持ち、ブースに立ち寄った



済生会共同治験ネットワーク展示ブース



【左】横浜市南部病院の安岡さん 【右】中央病院の亀田さん

済生会臨床試験研究会長として標準業務手順書（SOP）の済生会グループにおける統一化に向けた取り組みを発表しました。

キーワードは
国際標準化と効率化

今春、国は「創薬力の向上により国民に最新の医薬品を迅速に届けるための構想会議」の中間とりまとめを発表。同会議では日本における医薬品産業の国際競争力低下やドラッグラグ／ドラッグロスの改善について

多く議論されました。その解決のキーワードは「国際標準化と効率化」だと筆者は感じます。

第24回CRCあり方会議では、日本国内で実施をする全ての医療機関の審査を一括で審議するIRBのシングル化や治験費用算定方式についてFMV（市場適正価格）の導入と課題も議論されました。

効率化はDXの他にもDCCT（分散化臨床試験）、PPI（研究への患者・市民参画）、人材育成など幅広い内容に焦点が当てられました。

今般、CRCあり方会議出席して、治験環境の変化を目的の当たりになるとともに臨床試験や治験に関わる人々と交流、意見交換することができました。

来年はより多くの済生会職員が参加し、本会の存在感を高めて行きたいと感じた学会でした。



済生会参加者。左から4人目が筆者



今年デビューした済生会キャラクター「さいせい」もお披露目